

ASIAN AND MIDDLE EASTERN STUDIES TRIPOS, PART IA

Japanese Studies

---

Wednesday 4 June 2014 09.00 – 12.00

---

**J.3 MODERN JAPANESE TEXTS 1**

Answer **ALL** questions.

Write your number **not** your name on the cover sheet of **each** Answer Book.

**STATIONERY REQUIREMENTS**

20 Page Answer Book x 1  
Rough Work Pad

**SPECIAL REQUIREMENTS**

none

**You may not start to read the questions  
printed on the subsequent pages of this  
question paper until instructed that you may  
do so by the Invigilator.**

## SECTION A

(1) Translate the following passage from a **seen** text into **English** and answer the accompanying questions:

(a) [12 marks]

きつかけは、夫を肺ガンで亡くした一人の女性の訴えだった。煙草の吸い過ぎが原因で夫が肺ガンになったのは、元はといえば夫が愛読していたハードボイルドの主人公がヘビースモーカーで、その影響を若い頃から受けていたからだ——そんな女性の訴えが、世論の後押しを受けて最高裁で勝訴し、作者と出版社に多額の賠償金が課せられたのだ。

その判決をきっかけに、同じような訴えが次々と起こされた。酒、ギャンブル、不倫——ある作家は、作中に出てきたカーチェイスと同じように運転したら事故を起こしたと訴えられ、別の作家は、発表した恋愛小説と同じ方法で告白したら振られてしまったと訴えられた。

裁判所の前例踏襲主義によって、それらの訴えは次々に勝訴していき、気がつけば、出版社は半分以上が倒産、作家の七割が廃業に追い込まれていた。

そのころになつて、ようやく「表現の自由」を危ぶむ声が高まり、その結果、注意書きが入っていれば責任は問われない、という結論になったのだ。

それ以来、どこの出版社でも、訴えられる可能性のある描写には自動的に注釈の入るソフトを作家に使わせるようになった。もちろん、ソフトを使わなくても小説は書けるが、出版社にチェックされて書き直しになることが多いし、仮に出版されたとしても、ソフトを使わずに執筆した作品は注意義務違反とみなされ、訴えられた場合、多額の賠償金を請求される可能性があるのだ。

結局、ソフトを使わずに仕事をしている作家は、いまではプロアマ問わず、皆無とってよかった。

MORIE KENJI, *Chūigaki*, in Atōda Takashi (ed.), *Shōto shōto no hanataba 2* (2010), pp. 158-9.

(b) 裁判所の前例踏襲主義によって Explain the use of によって and give two examples in Japanese with English translations. [4 marks]

(c) という結論になったのだ Explain the use of のだ in this sentence and give two examples in Japanese with English translations. [4 marks]

(d) 使わせるようになった Explain the use of 使わせる and ようになった and give one example in Japanese combining these two grammar points. Give also the English translation. [4 marks]

(2) Translate the following passage from a **seen** text into **English** and answer the accompanying questions:

(a) [12 marks]

もはや、戦争をするどころではなかった。戦争は余裕のあった時代の、遊びのひとつとして思い出された。だが、戦争をしなくなっても、科学は進歩した。ふえつつづける人間を整理するには、科学にたよらなければならぬのだ。  
人口がふえると、その生活を保障するために、科学を進めなければならない。しかし、科学が進むと生活が高まり、さらに人口がふえた。このいちごっこをくり返す人間たちは全能力をあげて人口増加との悲壮な戦いをつづけていた。一刻も休むわけにいかず、また、勝利の見とおしのない戦いだっただ。  
食料は人工的に合成されるようになり、植物はいらなくなった。炭酸ガスを酸素にもどすことも機械的に行われるので、植物のありがたみは少なくなる一方だった。べつに植物がさらいになったのではない。植物を生育させる場所が、なくなっていたのだ。  
動物や昆虫も、とうの昔に一掃された。食料が惜しいからではない。そんなものを、生かしておく場所がないのだった。チョウも花も、人間の生存のためには、身を引いてもらわなければならなかった。地球は人類のものなのだから。  
科学の進歩は、副産物として、寿命をも伸ばした。これがまた、人口増加に拍車をかけた。地球が一回転するたびに、その表面の人口は雪だるまのようにふえていった。「百億を越えた」そして、まもなく「二百億を越えた」

HOSHI SHIN'ICHI, *Saigo no chikyūjin*, in *Bokkochan* (1971), p. 332.

(b) 戦争をするどころではなかった Explain the use of どころではなかった and give one example in Japanese with English translation. [4 marks]

(c) 人口がふえると Explain the use of と in this sentence and give two examples in Japanese with English translations. [4 marks]

(d) 少なくなる一方だった Explain the use of 一方だ and give one example in Japanese with English translation. [4 marks]

(TURN OVER)

(3) Translate the following passage from a **seen** text into **English**: [12 marks]

「さあ、もう一度押すじゃあ。」

良平は年下の二人といっしょに、またトロッコを押し上げにかかった。が、まだ車輪も動かないうちに、突然彼らの後ろには、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞こえ出したと思うと、急にこういう怒鳴り声に変わった。

「この野郎！誰に断わってトロにさわった？」

そこには古い印半纏に、季節外れの麦藁帽をかぶった、背の高い土工がたずんでいる。—そういう姿が目にはいった時、良平は年下の二人といっしょに、もう五六間逃げ出していた。—それぎり良平は使いの帰りに、人気のない工事場のトロッコを見ても、二度と乗ってみようと思ったことはない。ただその時の土工の姿は、今でも良平の頭のどこかに、はっきりした記憶を残している。薄明りの中にほのめいた、小さい黄色の麦藁帽、—しかしその記憶さえも、年ごとに色彩は薄れるらしい。

その後十日余りたってから、良平はまたたった一人、午過ぎの工事場にたずみながら、トロッコの来るのを眺めていた。すると土を積んだトロッコのほかに、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になるはずの、太い線路を登って来た。このトロッコを押しているのは、二人とも若い男だった。良平は彼らを見た時から、何だか親しみやすいような気がした。「この人たちならば叱られない。」—彼はそう思いながら、トロッコの側へ駆けて行った。

「おじさん。押してやろうか？」

その中の一人、一縞のシャツを着ている男は、俯向きにトロッコを押したまま、思った通り快い返事をした。

「おお、押してくよう。」

良平は二人の間にはいると、力いっぱい押し始めた。

「われはなかなか力があるな。」

AKUTAGAWA RYŪNOSUKE, 'Torokko', *Akutagawa Ryūnosuke shū*, p. 305.

## SECTION B

(4) Translate the following passage from an **unseen** text into **English**:  
[40 marks]

私の雇い主スコット氏は早起きだ。六時には起きて、たとえ寒い寒い真冬でも、外へ出て、自分で庭掃除をする。キッチンの前の庭をきれいに掃くのである。庭は二つあって、もう一つは公園のように広い。そこは庭師のステイヴがやってきて、一週間に一度、時には二度、芝生を刈り、木々や花々に水をやる。だからスコット氏は小さい方の庭掃除をして、四つのゴミ箱をピカピカになるまで手で磨きあげるのだ。

掃除が終わると、にこにこ笑いながらブレックファーストルームにやってくる。黙って座り、私がカップにコーヒーを入れると、「今日は寒そうだ」とか、「暑そうだ」とか話す。

私はかれが朝食を食べている間に、洗ってある衣類にアイロンをかけた洗濯機へ行く。好きなテープをラジカセで聞きながらのアイロンかけ、私の大好きな時間。それが終わったころ、スコット氏はシャワーをあび、着がえて、ガレージへ行き、ポルシェに乗ってオフィスへ向かう。

私は一人で朝食をとる。洗い物をさら洗い機へ入れ、スコット氏の残していった洗濯ものを洗濯機へ放り込み、かれの靴を磨き、私のも磨く。そのころ、次男のルークが起きて来て朝食。自分で作って食べるから手がかからない。かれも食べ終わるとシャワーをあび、トヨタのジープに乗って学校へ行く。

次にルークの部屋へ行き、ルークの洗濯ものを集めて（かれは二つの部屋のあっちこっちに放ったままなので）、私の下着と一緒に洗濯機へ。そのころ、ペンキ屋のテッドか、電気屋か、インテリアデザイナーか、家具屋か、庭師のステイヴ、だれか必ずやってくる。かれらにお茶を作り、おしゃべりをする。その後、買い物に行く。スーパーが遠いので行きはバスで、荷物をかかえた帰りはタクシーで戻ってくる。

雇い主 employer

掃除 そうじ

磨くみがく

ラジカセ radio cassette player

TAKAO KEIKO, *Igirisu wa okashii*, pp. 18-9 (adapted).

END OF PAPER